

★カトリック香里教会 主の降誕(夜半) 2021年12月25日★

— イザヤ9章・1-3,5-6、テトス2章・11-14、ルカ 2章1-14 —

ヨセフもダビデの家系であり、またその血筋であったので、ガリラヤの町ナザレからユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。身重になっていた、いいなずけのマリアと一緒に登録するためである。ところが、彼らがそこにいるうちに、マリアは月が満ちて、初子の男子を産み、産着にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる所がなかったからである。さて、その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。すると、主の天使が現れ、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。天使は言った。「恐れるな。私は、すべての民に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町に、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、産着にくるまって飼い葉桶に寝ている乳飲み子を見つける。これがあなたがたへのしるしである。」  
-ルカ 2章-

## 闇に輝く光

まだ赤ちゃんだった時、お母さんがすべてだったように神様を必要としていた人類は、物質的にも知的にも豊かさが増した時、神はいらないと考えるようになり、手あたり次第、欲望の先に豊かさを求める人になりました。そして、皮肉にも、その豊かさの中で、現代「生きがい」を探して自殺にまで追い込まれていく人がなんと多いことでしょうか。

かつて私たちみんなが貧しかった頃、私は今のような生きがいという言葉を知りませんでした。生きることが生きがいでしたから。街中で見かけるクリスマスの飾りはイルミネーションが光の海を呈して、世の中、何処にも闇がないかのような錯覚に陥ります。しかし、「生きがい探し」が存在している現実、蝋燭の火でも、イルミネーションの灯でも、太陽でさえも照らせない心の闇があるということを示しているのです。

クリスマスの飾りを見ると、そこから連想するものは、多分パーティーや嬉しいプレゼントかも知れませんが、本当に大切な飾りは「貧しさ」の象徴である「主の飼い葉桶」なのです。



飼い葉桶は、牛や羊がご飯を食べる茶碗の中から“私を食べてください。私のような人になるために”という私たちへの神のメッセージです。釜ヶ崎で活動している人たちは主の飼い葉桶は造らないそうです。”釜ヶ崎”そのものを飼い葉桶と見ているからです。

あなたにとってベツレヘムはどこでしょう？そこには、無力で貧しい幼子に奉仕しておられる母マリア様と、世の波に流されないように気を配っておられる父ヨセフ様がその闇を照らす光である御子とともにあなたの訪問を待っております。

コロナ禍の中、先行き不安定な、暗く、罪多い世の中であればこそ、愛と真実の光をもたらすために来られた貧しい主を見つめて、私たちもヨセフ、マリア様とともにこの年を、幼子への奉仕に捧げる心を新たにしていきたいと思います。  
2021年12月25日 主任司祭 昌川信雄